和辻哲郎『風土』における「間柄」の試論

山村　美保里[1]

[1]正会員　工博　愛国学園短期大学
（〒133-8585　東京都江戸川区西小岩5-7-1，E-mail：yamamura@aikoku-jc.ac.jp）

和辻哲郎著の『風土』は，土木景観学をはじめ多分野から注目のある著名な論考で，1927年ドイツ留学中に発表されたハイデガー存在論から着想され，帰国後2年間の草稿が基となって1935年に発表された．本稿は，和辻風土学の根幹概念である「間柄」に着目し，1930年当時の思考の過程が記されていると評される著書を中心に，和辻が「間柄」を創出した背景と，「間柄」に見出した特徴を抽出することを試みた．孤立する個へではない共同態における人間とその関係から存在を構成する意図があることが確認された．

キーワード:和辻哲郎，風土，間柄

１．はじめに

⑴背景と目的

土木景観学において，風土の概念はしばしば引用されてきた．中村良夫氏は著書『風土自治』[1]で「風土を継承し推進するまちづくりの仕組みを提案」することを目的に，風土を基底とした新たな風景論まちづくり論を展開した．同著に引用解説されている哲学者和辻哲郎による『風土』[2]は，版を重ねて多くの人の関心を集めてきたが，和辻の意図する概念の理解は容易とはいえない．ハイデガーの存在論から得た「我々自身が外に出ている」ことを「寒さ」を用いて説明するが，元の概念もその有名な例えも難解である．

『風土』は**表-1**に示すように，序言と5つの章で構成され，序言と1章が哲学的内容，2・3章が具体的な風土観察の記録の人文地理学的内容，4章は芸術の創作は誕生する場所により異なるという芸術創作に関する論考，5章は古代からの風土学の概略で風土論の経緯を整理した研究の位置づけといえる．そして藤井が指摘したように[3]，前半の哲学的内容を2～4章において論証する構成である．『風土』以降の風土学について考察した木岡は，風土学は和辻以降に進展がないといい，その理由を『風土』は前半が哲学分野，後半が人文地理学分野となっており，哲学者は地理学が，地理学者は哲学が専門外となるため発展させることが難しかったと分析している[4]．

表-1　『風土』の構成

章	内容	特徴
序言	「風土」執筆の背景	哲学的
1章	風土の基礎理論 風土の現象／人間存在の風土的規定	
2章	三つの類型 モンスーン／　砂漠　／　牧場	人文地理学的
3章	モンスーン的風土のの特殊形態 シナ　／　日本	
4章	芸術の風土的性格	芸術論（土地との関係）
5章	風土の歴史的考察 ヘルデルに至るまで～ヘーゲル以後	既往知見の整理

1935年『風土』発表直後から批判の多くが人文地理学分野の環境決定論の不備に対するものであった．それに対し和辻は1948年改訂版『風土』末尾に，人文地理学の乏しい知識での考察であったことを記す一方で，和辻の風土学のねらいは人文地理学と同じではないと加筆している．『風土』の目的は「人間の歴史的・風土的特殊構造を風土の側から把捉」することであり，従って序言と１章の理解は必須であるといえる．和辻は人間を，個人としての存在と同時に，人々の結合あるいは共同態[注1]である社会を構成する存在でもある「二重性格」と捉える．その根本を支える和辻倫理学における重要概念が「間柄」であり，『風土』理解に欠かせない．

そこで本研究は，和辻及び関連する論考から「間柄」の概念が着想された背景と，「間柄」の特徴を提示することを目的とする．

⑵研究の方法

和辻はドイツ留学(1927～28)から帰国後間もない1928～29年に『風土』本文の初稿を執筆している（**表-2**）．『風土』刊行前に発表された著書に『倫理学―人間の学としての倫理学の意義及び方法(1931年)（以下，初稿倫理学とする）』[5]，『人間の学としての倫理学(1934年)』[6]がある．後者は前者を改訂したもので和辻倫理学の入門書として広く読まれてきた．そして『初稿倫理学』の解説において苅部は，『初稿倫理学』は『人間の学とし

ての倫理学』より「着想の道筋をはっきりと表している」「詳しい注がついて議論の背景を知りやすい」「和辻倫理学の根本をなす「間柄」としての人間の捉え方を，わかりやすく提示している」と述べており，『初稿倫理学』は『風土』執筆の背景を理解するために適していると考えられる．また和辻が「間柄」の語を使い始めた時期は，東島[7]の以下の指摘により，1930～31年頃と考えられる．和辻は，マルクス・エンゲルス共著『ドイッチェ・イデオロギー』三木清1930年訳の「動物にとっては他との関係は関係として存しないのである」の箇所の『初稿倫理学』への引用の際に「関係は関係として（即ち間柄としては）存しない[8]」とし，東島はこれを「和辻による改訳の瞬間を確認」と述べている．

以上より「間柄」試論の資料として『初稿倫理学』を第一に用い，適宜他著書も引用することとする．尚，本稿本文において『初稿倫理学』の引用は該当箇所頁数のみ三桁の数字で記載する．他の文献は，1943年刊『風土』（風，頁数），1934刊『人間の学としての倫理学』（人，頁数），『倫理学（下）』[9]（倫下，頁数），『私の根本の考』[10]（私，頁数）とし，参考文献に個別には記載しない．

⑶ 研究の位置づけ

『風土』は多く研究されてきてたが，人文地理学的分野を踏まえた哲学的分野に対する論考では，前章で記した木岡の他，星野はハイデガー存在論による和辻風土論の解明を行い[11]，藤田はハイデガー存在論及びベルク氏の「通態」の概念を用いて人の環境への志向による風土形成及び，環境決定論的であるという批判への見解を示した[12]．いずれも「間柄」は関係として扱い、詳細な解明は行われていない．土木学実践への示唆を与える目的で『風土』読み解いた藤井は，構成及びハイデガー存在論の限界性を指摘しているが，空間は普遍的な空間を想定している[3]．文化としての風土論を展開した人文地理学者オギュスタン・ベルク氏は『風土』の日本以外の事例は決定論的としつつ人間の存在論的視点からの自然環境との関係の考察は意義深いとし，独創的な概念「通態 trajective」を提唱した．通態は共同態の秩序化／再秩序化であり，風土は個人と共同態が相互理解を経ながら形成されることを指摘した[13]．中村氏は『風土』の哲学分野の解明を行い，さらに氏独自の風土論を発展させた[1]．和歌を例に作者によって発見された季節感が一般化される，つまり個人の志向性の発露が風土形成の要因であることの示唆は、中村氏の独自性であると考えられる。山村は中村氏の解明を土台に，時間に関する既往知見の考察を加えた『風土』把捉を試みた[14]．

本稿は『風土』の環境決定論不備への批判は本質的問題ではないと考え，哲学的分野の既往知見と和辻の著書から「間柄」の把握を試みるもので，風土学に関する哲学的研究分野の一側面と位置づけられる．

２．「間柄」着想の背景

⑴『風土』5章の概観

和辻は5章において古代ギリシャからの風土論の知見

表-2　『風土』に関する年表

年		事項（「間柄」の考察に関する事項のみ）	和辻の略歴		「風土」各章執筆年					
西暦	元号		所属	年齢	序言	1章	2章	3章	4章	5章
1925	T14		京都大学助教授	36						
1926	S1			37						
1927	S2	M.ハイデガー「存在と時間」発表	ドイツ留学（～'28）	38						
1928	S3	「風土」のもととなる講義		39			初稿			初稿
1929	S4			40		初稿	加筆（モ,砂）	初稿（シ,台）	初稿	
1930	S5			41						
1931	S6	「倫理学―人間の学としての倫理学の意義及び方法」初稿	京都大学倫理学担当教授	42		改稿		初稿（珍）		
1932	S7			43						
1933	S8			44	初稿					
1934	S9	「人間の学としての倫理学」刊行	東京帝国大学倫理学教授	45						
1935	S10	「風土」刊行，　雑誌「思想」に「面とペルソナ」掲載		46		補筆	加筆（牧）			
1936	S11			47						
1937	S12	「倫理学（上）」刊行		48						
1938	S13			49						
1939	S14			50						
1940	S15			51						
1941	S16			52						
1942	S17	「倫理学（中）」刊行		53						
1943	S18	「風土」改定版刊行（第3章シナの部を書き改め）		54	補筆			改稿（シナ）		
1944	S19			55						
1945	S20			56						
1946	S21			57						
1947	S22			58						
1948	S23	「風土」末尾に風土性について倫理学（下）に執筆した旨追記		59						
1949	S24	「倫理学（下）」刊行	定年退官	60						
1950	S25			61						
1951	S26	雑誌「青淵」に「私の根本の考」掲載		62						

注
モ：モンスーン　シ：シナ
砂：砂漠　台：日本の項の台風的性格
牧：牧場　珍：日本の項の日本の珍しさ

執筆年事項はすべて『風土』'79岩波書店による。

を整理し，「風土の人間に及ぼす影響というごとき意味で今でも普通に考えられていることは，すでに言いつくされているといってよい(風 247)」と述べ，和辻にとっての問題は「風土現象の本質が何かは問われておらぬ(風 247)」ことであった．続いて 16 世紀フランスでの「風土の相違によって労働の仕方の相違が引き起こされ，それが強く自然的素質に影響する(風 248)」という議論や，18 世紀ドイツでの「人間をして自然を征服し変化させるさまざまの態度にいでしむるもの，自然との戦いにおいて互いに結合し，種々の社会を作らしめるもの(風 249)」等の言説を抽出した．さらに同時代のドイツのヘルデルに着目し「風土を歴史に関係させて説くとき，それを自然科学的な『認識』の対象としてではなく，それにおいて内的なものの現れている『しるし』として取り扱っている(風 250-251)」に注目し，さらに「人の思惟力・感受力全体の風土学」を作ろうとしたことが重視されるべきと述べている．ヘルデルの「風土や生活の仕方を単なる認識の対象として取り扱わず，主体的な人間存在の表現とみる態度が一貫している(風 254)」「国土との密接な関係において形成せられている感性的な民族が，その国土に忠実であり，その国土から離れ難く感ずる，ということの理由がまず明らかになる．それは彼らの肉体や，生活の仕方の性質や，子供の時から慣れている娯楽や仕事などが，言い換えれば彼らの心の全視界が，風土的だからである．彼らからその国土を奪うことは，彼らからすべてを奪うことにほからならぬ(風 256)」等を引用して，風土から引きはがした人間，人間から引きはがした風土という抽象的な対象を扱うことの問題を指摘し，「風土と人間との関係を明らかにすること」の意義を提示している．さらにヘーゲルの歴史性認識と，現実的存在が自然の内と空間の内に同時あることの指摘から，自然を単に外面的に捉えるのではなく，民俗の形作る自然の型を知ることにも意義があると述べている．

以上より和辻は，風土学における先行知見を確認した上で，「風土現象の本質」を明らかにすることを『風土』目的としたことを確認した．その背景に近代哲学の認識論への問題意識と，解明の手法として人々の生業や日々の暮らしに着目することがあったといえる．

⑵ 孤立した個への批判と社会的存在の人間

和辻は，一つの対象を追及する近代自然科学的姿勢の科学発展における意義を認めつつ，一方で「共同性は近代哲学の出発点に於いて極めて単純に見捨てられた(105)」とし，そこが問題であると考えている．近代哲学を強く支配したデカルトの思考は，没交渉の環境を作るために13度住まいを変え，ただ自分だけがいる環境において尚，疑う「我」を発見したものである．これに対して和辻は，人間は一般的にそうした特殊な環境で生活することはできない，さらに問うこと自体が共同の表象であり個だけで思考することと矛盾するという (105-107). 関わりを捨てた孤立した個人は，人間の一つの契機を抽象的に取り出したものであり，人間存在そのものではない(087). さらに，人間の本質は社会的関係の総体であり実践的であるというマルクスの論理と，他の先行の考察から，人間の意識と人間関係とでは，人間関係が先であると述べる．例えば飢餓が生じた時，パン，米等を食いたいという意識が生ずるのは「飢餓に対応するものは，新たに探す自然物ではなくて既に社会的に決まっている食べ物であるからであり，社会的関係が意識より先(私 024)」であるという．人は生きていくため生産活動をするが，そのための自然物の利用に関する技術は，相互理解的に共同の生活を生産する意識以前(038)のものである．

以上，和辻が人間の存在を抽象的環境における個として捉える矛盾を指摘し，社会的関係の総体にあるとしたことを確認した．それが次節以降の，自我が対象物を意識するのではなく，対象を志向する関係が先にありそれによって対象を意識する考察へ発展する．

⑶ ハイデガー存在論と「外に出ている」

和辻は『風土』冒頭で「風土性の問題を考え始めたのは，1927年の初夏ベルリンにおいてハイデッガー[注2]の「有と時間」[注3]を読んだ時」と記し，さらに「人の存在の構造を時間性として把握する試みは，自分にとって非常に興味深いものであった．しかし時間性がかく主体的存在構造として活かされたときに，なぜ同時に空間性が，同じく根源的な存在構造として，活かされて来ないのか，それが自分には問題であった．（略）そこに自分はハイデッガーの仕事の限界を見たのである．空間性に即せざる時間性はいまだ真に時間性ではない．ハイデッガーがそこに留まったのは彼のDaseinがあくまでも個人に過ぎなかったからである(風003-004)」と述べている．ハイデガー存在論が『風土』執筆契機であったことは先行研究も触れているが，和辻が何を限界であると考えたかは十分には明らかではない．そこで本節では和辻がハイデガーの限界と考えた意図を読み取ることを試みる．ただしハイデガー存在論は難解でその全体的本質的把握は筆者の能力を超えるため，本研究に必要な概念に限り扱った．

ハイデガーは「現存在」の理解には専用の用語を定義して用いる必要があるという．**表-3**に代表的な用語を，日本語訳，原著ドイツ語，英語訳（日本語より概念を把握しやすい）で記した．日本語訳は『存在と時間』細谷貞雄訳(1964)[15]，英語訳は翻訳ソフト「DeepL」（2023年8月最終変換）を用いた．筆者の解釈の概略記すと「現存在」が対象を志向することによって「現存在」が関わる

環境世界＝「世界-内-存在」が現れる．これが「実存」であり，将来の「現存在」も規定＝「投企」する．「既在」と訳され「その都度，すでに存在していたありさま」と解説されている「Gewesen」は、英語訳はbeen(has been)であり，過去のある時点の出来事の現在まで継続している状態を指し「現存在」に内在化されている．

ハイデガーによる「現存在」ついての例えの一つに，過去に日常的に使われ今は骨董品の展示物となった机を「かつて一定の道具立ての連関に所属して，その内部で用にそなわるものとして出会い，配慮的な世界-内-存在的な現存在によって使用されていたところのその世界が過ぎ去った」がある．机はかつての日常で使われていた環境には無いことを述べているのだが，「現存在」と「世界-内-存在」の関係を具体的に示している数少ない例である．そして和辻はハイデガーについて「人間は対象に於いておのれ自身を見出す（略）人間が対象を見出すとき，すでにそこに汝として外に出でたる我を見出すのである．かく根源的な『外に出る』場面，即ち超越の場面を人間に於いて見出したという功績は充分承認されなければならぬ(037)」と述べ，ハイデガー存在論によって，人工的抽象的環境における自我が対象を意識するというデカルト由来の考え方の弊害を根本的に改めることが可能となったこと，それによって「外に出る」ことを説明できるようになったことに意義を見出している．

しかし「現存在」は，一人と対象物との関係である．「ハイデッガーは己有の理解を対象の有の理解の中に解消させてしまう (150)」「人間の存在が先ず第一に人間ならざるものとの係りとして把捉せられることは，彼の問題の必然の結果と云わねばならぬ(151)」といい，現存在が個人に過ぎず共同態の概念を持ちえないことがハイデガーの限界と述べている．ハイデガーも他人との共現有[注4]を示しているが，道具を通しての共有であり「アトム的なる現有の共在であって，一つの全体としての「共同態」ではない．（略）あくまでも有の理解を介してのみ他人が出てくると考えたところに，現有の存在構造の分析の著しい限界がある(153)」と指摘している．それは「我のみの存在に於いて取り扱われ得る時間性の問題に局限せられ，人と人との間を構成する肉体性は無視せられてしまう(154)」のである．ここに和辻が世間，世の中という人と人の間における社会的な時間性と，我々の志向が相互に外に出ていることを含めた「間柄」が着想されてきたと考えられる．

表-3　ハイデガー存在論「現存在」に関する主な用語

日本語訳	原著	英語訳	備考
現存在	Dasein	being, existing	人間のこと．和辻は「現有」を用いる
世界-内-存在	In-der-Welt-sein	being-in-the-world	現存在が組み込まれた世界
実存	Existenz	existence	
了解	Verstehen	understand	
既在	Gewesen	has been	現象学の根本問題16）より．細谷訳「既往」
投企	Entwerfen	draft, design	
歴史	Geshichte	history	「来歴」に近い概念
経歴	Geschehen	done, happened	
時間性	Zeitlichkeit	temporality	
超越	Transzendenz	transcendence	
通路	Zugang	access	

３．「間柄」の特徴

前章において確認した和辻の「間柄」の着想の背景を踏まえ，本章では「間柄」の内容と特徴を試論する．

⑴著書における「間柄」の記述内容

まず『風土』における「間柄」の主な記述を以下に確認する．「寒気というごとき「もの」の中に出るよりも先に，すでに他の我れの中に出るということにおいて存している．これは志向的関係ではなくして「間柄」である．寒さにおいて己れを見いだすのは，根源的には間柄としての我々なのである (風13)」「（身心二元論に対して）「間柄」から遊離せしめられた人(風21)」「人と人との「間柄」が超越の場面でなくてはならぬ．自他を見いだしさしめる地盤としての間柄そのものが，本来「外に出る」場面なのである(風22)」「我々の個人的・社会的な存在は，すでに有るところの「間柄」としてそれに属する個人の存在の仕方(風25)」等である．

それを読み解いた中村氏は「風土を共有する「間柄的人間」というすこぶるユニークな人間観(239)」「現象学の血筋をひく「志向性」と和辻の独創といえる「間柄性」は，それぞれ近代的に抽象化される以前の時間と空間の顕れ(240)」と記している．これらから「間柄」は，人と人，人と対象との関係であり，またその関係による表象が現れる空間を指すと考えてよいといえる．

次に『風土』初稿執筆直後に発表された『初稿倫理学』の記載を中心に，和辻が「間柄」にいかなる特徴・性質があると考えたかを検討する．

1-(2)で既述した『ドイッチェ・イデオロギー』三木訳を引用した箇所の前後は「言語は（その生起について云えば）意識と同じく他の人間との交通の欲望・必要があるから初めて生起する．関係（間柄Verhaltnis）＝英語Relation，筆者加筆）が存すれば，それは私にとって存するのである．（略）動物にとっては他との関係は関係としては（即ち間柄としては）存しない (039)」の引用に続き「人間の間柄はそれが意識や言語として発展するところの間柄(040)」と和辻の見解を述べている．動物に関しては1930年当時の動物観であり現在の知見からは妥当とはいえないが，重要なのは，人間は自身の欲望・希望を他者に伝え意思疎通するために意識や言語が生まれたのであり，「間柄」がその基底となっているということである．「人間とは一定の間柄に於ける我々自身である

(102)」「我々にとって人間は間柄における人であり人における間柄である(118)」から，人と人との関係を指しているといえる．次に「元来志那語の「倫」は「なかま」の意味を持っている．（略）「なかま」は日本語の「仲」「間」が示しているように，ある関係に立つ人々を個別に把捉するのではなく，それらを「間柄」として把捉するのである．（略）君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友という五つの「間柄」は同時に五つの「秩序」を意味する(081)」は，当時の代表的な人間関係をあげ，人が人と関係する時には，その間の規範が存在することを示している．また「世の中は第一に人の社会であり，時間的・空間的性格を持つ…「いる」の持っている場所的な意味はまず第一に人間の間柄を意味せねばならぬ(100)」は，存在の「存」が時間的に有ること「在」が空間的に有ること(058)を踏まえた，ある場所に人がいることを説いた箇所で，共同態における人間の存在を示している．「我々は汝或は他者を通じて我を見出すのであり，汝或は他者が見出しているのは間柄の故である(119)」は，間柄があることは自分と関係する他者を通して自己が発見・了解されることを示している．「「もの」と「我」との関係は，その真相に於いては「間柄における我」と「もの」との関係に他ならない．ものを志向するのは「孤立した我」ではなくして「間柄における我」である(120)」では，デカルト的抽象的な自己ではなく，間柄における実生活における自己を現わしている．「実践生活に於いては表現と理解とを必然的に呼び起こすような間柄がすでに存するのである．その間柄の客観化が表現であり客観化による間柄の自覚が理解である．（略）共同性と呼ばれるるものが実践的な間柄としてすでに直接の意識以前の理解をふくみ，体験・表現・理解の聯関を可能ならしめる(128)」は，言語や行為等の表象はある集団における意思表示等の必要の結果に生じるのであるが，「挨拶と雖も知り合うという間柄が挨拶に先立って与えられていなければ表現として無意義である．表現はかく先立てる間柄の客観化である(138)」のように，表象より関係が先であるという．また「文化活動は共同性の表現としての文化産物を作ることにおいて人間の間柄を作る働き(倫下115)」というように，間柄から生じた表象は次の間柄を作ることができる．「分離はあくまで統一に於ける分離であり，従って孤立的な分離ではなくして「間柄」である．分かれつつ一であるということに於いてのみ間柄は成立する(139)」「人間の存在を「間柄に於いて生きていること」として規定(158)」は，『風土』において強調されている個人的・社会的存在としての人の二重性格を可能とさせている要素である．

以上より『初稿倫理学』において和辻が用い始めた「間柄」は，①人と人との関係，であることは明らかである．さらに②意思疎通のための意識や言語，③集団における規範，③自己発見・自己了解，④表象・表現，等②～④が生じる基であると考えている．④は共同の活動よって「間柄」を作る機能がある．さらに⑤デカルト的抽象的人間に対して実践的な人間，及び⑥人間の個人的・社会的の二重性格，という人間存在の根本を指す．

本項において和辻の「間柄」は，人と人，人と対象との関係と，相互の志向性が現れる空間と考えられること，①～⑥の特徴・性質があることを示した．

⑵「間柄」と風土との関係

ハイデガーの「現存在」は，時間性を持つ存在としては明らかにされたが，共同態としての存在構築は充分ではなかった．和辻は「風土的特性の問題は根源的に明らかにされなくてはならない(風028)」と述べ，人と人との間柄のある共同態をも時間性を持つ存在として示すために，風土の型を考察する必要があると考えた．

個に限定されてはいたが「現存在」は「既在」を内在化させ，それによって対象を志向した．では共同態における「既在」は何が相当するのであろうか．一つは「祖先以来の長い間の了解の堆積を我々のものとしている(風015)」「一定の存在の仕方を背負う．風土的負荷(風028)」であると筆者は考える．ある地域の伝統的な家づくりの仕方は，共同態内において長い時間をかけて気候や生業にとって最適となるように工夫を続けた結果（祖先以来の了解の堆積）の一定の作法である．和辻が着物や食べ物を，中村氏が寿司を例にしているように，暮らしの中のそれらは，祖先以来の了解の堆積，すなわち共同態の「既在」と考えることができる．また原始社会の若者が長老から集団の歴史を教え込まれることを「集団の過去が客観的公共的な共同知に発展(倫下157)」のように，物理的に認識可能な対象だけではなく言葉や認識による歴史なども共同態の「既在」と考えられる．

以上より風土の型，特徴を分析することは，間柄における人間を時間性においても規定することを可能にする手法であると考えたといえる．それが「家を作る仕方の固定は，風土における人間の自己了解の表現にほかならぬ(風016)」という自己の確立及び発見の根幹となる．

⑶風土性の具体例

和辻の「寒さが外に出ている」の風土性の例えは，筆者には肌感覚の寒さとの区別が難しく思われたため，桜の花を見て春らしさを感じる別の例えで考えてみる．まず，桜そのものが人間が春らしいと感じる普遍的な何かを発しているのなら，四季のない砂漠や熱帯地方に生まれ育った人でも桜の花を見て春らしいと感じるはずであるが，桜の花を知らずに育った人が，桜を見て春らしい

と感じることはないであろう．この違いの生じる過程は，以下のように考えられる．日本に暮らす人々は，毎年時期になると桜前線や開花のニュースを聞き，桜の咲く卒業式や花見を経験し，花見弁当や桜にちなんだ菓子を食べて過ごしてきた．そうした習慣が我々の中に桜との関係を育み，桜の花＝春らしいという規範として我々のうちに内在化し，その結果桜の花を見る，つまり桜を志向して春らしいと感じる人間となったと考えられる．桜の花が発した春らしさを我々が受け取るのではなく，我々の中のこれまでの桜との関係が春らしさを生じさせる．これらの習慣は過去の人々の桜との関係の表象で，また一人で習得するものではなく，人と人，人と自然との「間柄」において生じ，実施される．桜が咲くと名所に人が集まりその人たちへの商売が出現するなど，桜との関わりから派生する表象が現れ，風土を形作り，それらの行為が新しい「間柄」を創出している．桜と日本人の行動や表象を分析することによって，日本人という共同態の存在様態が示されるといえる，と考えらえる．

４．おわりに

本稿は『風土』理解のために，和辻独創の「間柄」概念の理解が必要であることから，その解明の端緒となれば幸いとして取り組みを始めたことによる．しかし周知のごとく非常に難解であり，不明の分野が広がっていることを確認したことが結果となった感がある．理解の至らなさ，適切ではない用語の使用等を詫びるとともに，解釈の違いなど指摘いただけると幸甚である．

最後に，風景と自己了解の関係について記したい．本稿で検証した和辻の風土概念からは，ある人にとって長年馴染んでいた街並みや風景は，その眺めやそこでの行為を通して自己を再現する場所といえ，街並みや風景の喪失は，自己の一部が再現されないことを意味する．そして他の風土を通して属する風土を自覚する風土の特性「自己の認識は必ず他を媒介とする(倫下 138)」を鑑みると，街並みや風景は失って後に自己にとっての価値，自己の一部が再現されていたことを自覚する傾向にある．再開発や災害で街並みや風景が一変することは，自己の一部を失うといえるのではないか．街並みや風景の改変は，経済的利点，交通利便，安全等への配慮に加えて，そこに関わる人びとのこれまでの関わりは自己了解であるという視点も必要と考える．今後の課題としたい．

注

注1：一般的には「共同体」と表記するが，本稿では和辻の「共同態」に従うこととする．

注2：ハイデガーの綴りはHeidegagrで，近年はハイデガーの表記が一般的であるが，引用元に従った．

注3：和辻は「Sein」の訳「存在」は誤りで，「有（ある，持つ）」「現有」が適切とする．前掲書5），p.58

注4：「現存在は，世界-内-存在たるかぎり，本質上，ほかの人びととの共同存在において実存しているのであるから，その現存在の経歴は共同経歴であり，共同運命（Geshick）という性格を帯びる，それは共同体の運命的経歴，民俗の経歴のことである．（略）おのれの世代のなかでの，かつおのれの世代と共にする現存在の運命的な共同経歴こそ，現存在の十全な本来的経歴をなす」前掲書15），p.326

参考文献

1) 中村良夫：風土自治—内発的まちづくりとは何か，藤原書店，2021
2) 和辻哲郎：風土（1943年改定版），岩波書店，1979
3) 藤井聡：実践的風土論にむけた和辻風土論の超克—近代保守思想に基づく和辻「風土：人間学的考察」の土木工学的批評，土木学会論文集D，Vol.62，No.3，2006
4) 木岡伸夫：「地理的決定論」再考『風土』の批判的受容をめぐって，関西大学文学論集，No.57，No.2，2007
5) 和辻哲郎：倫理学—人間の学としての倫理学の意義及び方法(1931)，初稿倫理学　苅部直編，筑摩書房，2017
6) 和辻哲郎：人間の学としての倫理学(1934)，岩波書店，2007
7) 東島誠：公共圏の歴史的創造，東京大学出版会，p.11，pp.24-25，2000
8) 前掲書5)，pp.39-40
9) 和辻哲郎：倫理学（三），岩波書店，2007．『倫理学』は上巻'37,中巻42,下巻'49 で刊行(表-2)，'65上下巻，'07年全4巻に改版された．本稿では筆者が入手した'07版第三巻の頁数を記した．
10) 和辻哲郎：私の根本の考 (1951)，初稿倫理学　苅部直編，筑摩書房，2017
11) 星野勉：和辻哲郎の「風土」論 —ハイデガー哲学との対決，法政大学文学部紀要，2005
12) 藤田正勝：和辻哲郎「風土」論の可能性と問題性，日本哲学史研究，京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要，2003
13) オギュスタン・ベルク(1988)：風土の日本，筑摩書房，篠田勝英訳，1992
14) 山村美保里：地域保全にかかる市民活動の持続性にみる風土的聖性の意味，東京工業大学大学院博士論文，pp.17-38，2023
15) マルティン・ハイデッガー（1927）：存在と時間上・下，細谷貞雄訳，筑摩書房，1964
16) マルティン・ハイデガー（1927）：現象学の根本問題，木田元監訳・平田裕之・迫田健一訳，作品社，2010